**方法論としての視点: 話者の視点と分析者の視点**

本多啓（神戸市外国語大学）

　用語としての「視点」さまざまな意味で用いられるが、本発表では「誰が見るのか（視点人物）」ないし「どこ から見るのか（視座）」という意味で用いる。その上で認知意味論研究と視点の関係について検討する。

　意味の研究において、視点人物に相当するものとしてまず思い浮かぶのは「話し手」「聞き手」であろうが、それに加えて他ならぬ我々「分析者」自身も視点人物である。話し手・聞き手にとっての事態の見えと分析者にとっての事態の見えはしばしば異なるが、分析者自身も視点人物であるということを考慮しないと、話し手・聞き手の視点に分析者自身の視点を投影してしまうことになりかねない。逆に、分析者の視点と話し手・聞き手の視点を峻別し、分析者にとっての見えとは異なる話し手にとっての見えを記述することにより、意味記述の妥当性を高めることができる。

　以上の問題意識を踏まえた事例研究として、（１）「駅が近づく」のような静止物を主語とする「近づく」の用法、（２）We are approaching Christmas. / Christmas is approaching.のような時空間メタファーの経験的基盤の検討、（３）認知文法における「参照点」概念の視点論からの検討、などを提示する。

　また、時間が許せば、このような「方法論としての視点」の考え方の学史的背景についても触れたい。